

スリランカにルーツ

突発的なけがや病気に対応し、市民の命を守る救急医療の現場に今月、県内で初めて外国籍の救急救命士が誕生した。スリランカ人の両親を持ち、岐阜で生まれ育ったカンカーニゲ・サチンさん(25)＝岐阜市加野＝。父親が祖国に救急車を贈るボランティアをしていたことがきっかけで、最前線の仕事を志した。「医療体制が整っていないスリランカで救急救命士の養成学校をつくり、一人でも多くの命を救いたい」。松波総合病院(羽島郡笠松町)の救急医療センターで勤務を始め、大きな夢に向けて第一歩を踏み出した。

(安井真由子)

スリランカの火災現場で活躍する「羽島郡消防」や「本巣市消防」と書かれた救急車。父ラールさん(61)がロータリークラブ(RC)の協力を得て、大垣市のRCを介して現地に車いすを寄贈したこと。その母国に贈った車両は100台を超え、始まりは1997年、スリランカの内戦で足を失った人が多くいることを聞いたラールさんが、留学生時代奨学金を受けた縁から、大垣市のRCを介して現地に車いすを寄贈したこと。その後30年近く、県内で役目を終えた救急車や消防車を整備し、スリランカに届けている。

八十川雄図センター長(左)からストレッチャーの使い方を教わるカンカーニゲ・サチンさん＝12日午前、羽島郡笠松町田代、松波総合病院



外国籍の救命士 県内初

岐阜育ちのサチンさん合格

車両を船で輸送する場に付いていったこともあるサチンさん。高校3年生になり「現地に救急医療を学んだ人がいれば、もっと有効に使ってもらえるのかも」と考えるようになった。2009年まで内戦の続いていたスリランカは、まだ医療体制が万全でなく、日本の救急救命士のような仕事もない。「いつかはスリランカに渡り、救急医療の必要性を広めたい」と救急救命士を目指して日本体育大に進学した。

東京や米シアトルでの病院実習を経て今年3月、国家試験に挑んだ。生まれてから25年日本で暮らしているのに、日本語の読み書きに不安はなかった。だが外国籍で国家試験を受ける人は珍しく、登録機関の担当者も戸惑うような状態。大学などのアドバイスも得ながら受験手続きを進め、必死に勉強した。

「無事に資格が取れました。合格は最初に、スリランカに住む祖母に電話して伝えた。父と母は「大丈夫だと思っていたよ」と喜んでくれた。松波総合病院が救急患者の受け入れ応需率が高いなど救急医療に力を入れていることを知り、今月3日から働いている。センターでは救急車から患者の状態を知らせる連絡が入ると、医師や看護師と連携し

「現地に学校、医療広めたい」

5〜10分で受け入れ体制を整える。「緊迫した空気の中でも、日々できることが増えていくのがうれしい」とサチンさん。現在担当のは心電図検査などにとどまるが、経験を積むことで圧迫止血や点滴の薬液充てんと可能な処置行為の幅が広がっていくという。「すぐに人と仲良くなれるタイプ」と自負するサチンさんを、指導する八十川雄図センター長(50)も「患者一人一人に寄り添う姿勢から、よい救急救命士になる素質を感じている」と評価する。英語とスリランカの公用語であるシンハラ語を話せるトリリンガルで、外国人患者と受け答えをする場面では周囲から頼りにされている。サチンさんは「救急救命士の仕事は患者が苦しむ時間を減らし、助かる確率をぐんと上げることができ、早く一人前になりたい」と前を向いた。



県内で初めて外国籍の救急救命士として働き始めたサチンさん＝同



救急救命士 医師の指示の下、傷病者が病院などに搬送されるまでの救急車内や、搬送されて入院するまでの間に気管挿管や薬剤の投与、心肺蘇生といった救急救命処置を行う。2018年時点で約5万6000人の登録があり、約6割が消防職員として働く。近年は病院などに常駐するケースも増えている。